
Bom ! No ! !

mamy

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B o m ! N o ! !

【Nコード】

N 7 9 9 9 L

【作者名】

m a m y

【あらすじ】

『そろそろ諦めたらどうだ、この、大黒天!』

『エロ煩惱108%のドスケベクソ野郎!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

幼馴染と○○○が繰り広げる、ドタバタSFラブコメWWW
001…諦めることを諦めた
プロローグとなっております。
ご期待下さい!!

001：諦めることを諦めた

連なった山の間から、太陽が顔を出し始めた、朝方5時。
淡い雲がオレンジ色に染まる。

まるで歌でも歌っているかのように、すずめが鳴いている。
心地よい風。

また新しい一日が始まる。

俺は今、猛烈に感動している！

生きていることが、こんなにも素晴らしいだなんて！！

：口に出したら赤面確定な、

そんな物思いにふけりながら、朝日を見つめる。

朝焼けが、目に染みるぜ☆

……。

なんてもんじゃない！

目が、目があ！

チカチカするううう！！

3分間待ってくれ。

いや、10分休憩しよう！

いやいや、もう終わりにして下さい！！

ゲームのやり過ぎで関節傷める子供だっているくらいだ。

それに、かつて高橋名人が言っていたじゃないか。

『ゲームは1日1時間』

当時の子供たちにとって、母親にプレイ時間を強制させるきっかけを生んだ、

この迷惑な迷言。魔の呪文。

当然、俺もその被害者の一人だ。

だが、この言葉に隠された本当の意味を知った時、俺にとって、この言葉は、どんな偉人の言葉よりも名言となった。

『決して、子供を持つ母親のためのリップサービスではないのです。子供の頃には成長する上で、いろんな経験をつまなければいけないのです。』

TVゲームも遊びの文化のひとつにはなったけれど、でも、そのひとつだけを遊んでいるのはやっぱりダメで、いろんな遊びをするから、いろいろと成長するのです。』

しかし、今、俺の横にいるこいつは

このゲーム一点においての成長を望んでいる。

いや、正しくは『勝利』の二文字を望んでいる。

『諦めることを諦める。』

それがこいつの行動理念なのである。

よって、例え、遊びの文化のひとつにおいても負けたままでいることなど許されるはずがない。

『ゲームは1日1時間』

その意味を履き違えた、当時の肝っ玉母さんたちでも、きつと、こいつは止められない。

いや、むしろこいつなら

「ゲームは一日『最低でも』一時間。うまくないなら精進しなさいって意味よ。」

と、履き違えたことにも全く気付かずに、父親のサンダルで100mを11秒フラットの日本新記録で駆け抜

けていくこと間違いなしだ。
そう。明後日の方向に。

「おい、さすがに次がラストだ。」

「ハア？あたしが勝つまで、やめるわけがないでしょうが！このポケナス！！」

ははは。

いや、ね。

却下されることはわかってはいましたよ。当然。

でも、ひどくないですか？

ゲーム始めてから何時間経ちました？？

10時間ですよ！じゅ・う・じ・か・ん！！

でもさ、いくら全敗してさ、いらいらしていたとしてもさ、
言っていることと悪いことがあると思うのだ。

「ボ…ボ……ポケナス…だと…？」

冷静さに定評のある俺だって、我慢の限界である。

MK5で、

プンスカプンの、

(#^ω^)ビキビキである。

「ふざけんな！目は痛いし、関節痛いし、親指痛いし、疲れたし、
眠いし！！

とにかくお前には即刻、お帰りいただきたい！！

そろそろ諦めたらどうだ、この、大黒天！」

「そのあだ名で呼ぶなって何度言ったら分かるの！？」

陸上部のかわいい、かわいい後輩たちから、

『天翔る天使、ミカエル様あ!』

と称される、このあたしに対して、そんなダサイ呼び方はやめて!
あー! ホント、ムカつく!!

この、エロ煩惱108%のドスケベクソ野郎!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
」

.....。

あまりの罵声に時が止まった。

これ、なんていうザ・ワールド??

そりゃ、朝だから仕方な(r y。

それに、自分の部屋におなごがおれば、

そんな気持ちになってもおかしくはない。

俺は、幼馴染ででも構わず食っちゃもう妄想族なんだぜ。

てか、それにしたって、

こいつの口の悪さは、あまりにもひどい。

ひど過ぎる。

花も恥じらうJK:げふんげふん。

女子高校生が言う言葉じゃないだろJK(常考)。

坂東眞理子先生も大爆笑だっぜ!

「おま、完全に頭きた。『諦めることを諦める』ことを諦めさせてやる! かかってこいや、ゴラ!」

「ふふふ。受けて立とうじゃないの!」

あゝもおゝ。

俺のバカ、バカ、バカあゝ。

もうゲームやめたいのにいゝ。

己から勝負を仕掛けてどうすんじゃい!!

いや、待てよ。

こいつに完全なる敗北の二文字を刻めば、
圧倒的な力の差を見せつけられ、

お帰りいただけるのではないだろうか。

そうさ、

きつと、そうさ!!

このゲームがラストになるよう、ズタボロに負かしてやる。

絶対泣かす。

本気出す。

本気になればすべてが変わる。

『やめぬなら

泣かせてみせよう

大黒天（字余り）』

そんなことしたら、確実に、

火に油をそそぐこと間違いなしだが、

俺のモチベーションを維持するためには、

松岡修造並みのポジティブな精神が必要なのである。

こいつと競い合う。

特に、こいつの不得意なもので競い合うときには、

余計に、である。

「…ねえ、無駄な妄想は終わった？準備いい？」

「お、おう。いつでもいいぞ。」

恐ろしや。

こいつ、読心術でも心得ているのか？

しかし、そんな能力、

このゲームには関係ない。

さっさと始めようではないか。

オンラインゲームよりも恐ろしい、この終わり無きゲームを!!

そんなことを考えながら、コントローラを握る。

何故、ゲーム機の持ち主の俺が2Pで、こいつが1Pなのかはもう突っ込むまい。

微かな希望だが零ではない!!

本気の俺に、負かされて、

泣きながら帰路につくがよい!!

ハハハハハ。フハハハハハハ!!!!

.....。

油断...していたのか?

いや、これは油断でもなんでもない。

圧倒的な力の差を見せつけられたのは、俺の方だった。

『えいつ』

おい!

『ファイヤー』

ちよつと待て!

『アイスストーム』

嘘だろ!

『ダイアキュート』

そんな馬鹿な!

『ブレインダムド』

おいおいおいおいおい!

『じゅげむ』

ふざけるなー!.....!!

『ばよえ〜ん』
『ばよえ〜ん』
『ばよえ〜ん』
『ばよえ〜ん』
『ばよえ〜ん』
『ばよえ〜ん』
『ばよえ〜ん』
『ばよえ〜ん』
『ばよえ〜ん』
『ばよえ〜ん』
『ばよえ〜ん』
『ばよえ〜ん』
『ばよえ〜ん』
『ばよえ〜ん』
『ばよえ〜ん』

言葉も出なかった。

20連鎖。初めて見た。

そうか、お前が『TASさん』なのか。

「おまえ、苦手なんじゃないの？落ちゲー。」

数秒の沈黙。

そして、こいつは、こう言った。

「…だって、帰りたくなかったんだもん。」

俺はこの日。

こいつのことを、

大黒ミカのことを好きであることを諦めることを諦めた。

「これからは『ゲームは1日10時間』…だな。」

「うるさい。…アホ。」

001: 諦めることを諦めた（後書き）

処女作です。緊張します。

呼んでくれた方、感謝、感激、雨、嵐!!

002..最悪の誕生日

大黒ミカ。

こいつとの出会いは忘れもしない、
小学校入学したての4月27日。
俺の誕生日。

半球体の遊具が目立つ、あの公園。

幼稚園年長の頃。

この地域で知らない者はいない、
怒羅夜鬼幼稚園のガキ大将、剛田君が、
俺の大事な、大事なサッカーボールを、
アロンアルファで、半球体のでっぺんにくっつけたことで、
『おっぱい公園』
と、呼ばれるようになった、あの公園（正式名称は忘れた）。

俺の人生最大のトラウマは、
大事なサッカーボールが乳首にされるよりも、
痛烈に、
強烈に、
熱烈に、
その公園の砂場にて植えつけられた。

大事な乳首を弄べなくなってから半年後。
活発なサッカー少年は、砂場にシンデレラ城を竣工させる
砂アート職人にクラスチェンジした。

誕生日プレゼントに買ってもらった宝物が、乳首になったことを親に伝えれば、新しく買ってもらえた可能性は否めないが、当時の俺は口が裂けても、そんなことは言えなかったわけで。まだ純情だったわけで。

ただ、捨てる神あれば、拾う神あり。

俺は恋に落ちた。

一目で恋に落ちた。

おっぱい公園で恋に落ちた。

初恋だった。

ピンク色のカチューシャが似合うかわいい女の子だった。心を奪われるとは、こういうことを言うのか。

「あたし、太黒ミカっていうの！」

拾ってきた木の棒で

砂地に名前を書く。

そして、ニコッと笑いながら、

「お城すごいねー！」

と、褒めてくれた。

男が砂遊びかよ！と、

バカにされ続けてきた、

俺の砂アートがここにきて、ようやく役に立った！

ただ、あまりの愛しさと、切なさと、心強さと、

何よりも、彼女の笑顔で、頭がいっぱいで、

話しかけたいのに言葉が出なかった。

「あなたのお名前は？」

「俺？俺は…」

そして、俺も彼女と同様に、砂地に名前を書いた。

「九十九に、弓と馬で、つくもきゅうま。」

「へえ。変わったお名前だね？」

「俺、この名前、あんまり好きじゃない。」

「なんで？」

「ナインティナインみたくな俺、面白くないし。それに、」

「それに？」

「弓に馬だから、TVで見る行事だ！とか言われる。しかも、」

「しかも??」

「クラスに出木杉って奴がいてさ。」

「うんうん。」

「『九十九きゅう百八、まるで君は煩惱の権化だ！』って言うてからあだ名が『煩惱』。」

「煩惱??」

「あつ、知らないならいいよ。」

「でも、弓に馬だったらケンタウロスもいるよ！かっこいいよ!!」

「ありがとう。」

「じゃあ、あたしと一緒にだね！」

「何が？」

「あたしの名前も神話に出てくるの」

「神話？」

「パパが、『ミカはパパとママの天使だから、天使ミカエルから名前を貰ってミカだ!』って」

「ミカちゃん、物知りだね。」

「えっへん!」

よほど、嬉しかったのか、ものすごい満足気。その顔もかわいかった。

俺も話しかけないと。何か、何か。

「ミカちゃんには名字が大黒だから神様でもあるね。」

「えっ？」

「七福神に大黒天っていう神様がいる。食べ物とお金の神様。」

.....

言つてから氣付いた。焦つていたとは言え、女の子に言う言葉ではない。

「あっ!?!?ごめん、ミ…」

[illegible]

その言葉と同時に、俺は天を舞った。

天使でも神でもないのに。

小学生ができる技なわけがない。

ましてや、女の子ができる技であるはずがない。

大黒ミカ恐るべし。

なんと、ジャーマンスープレックスホールドを華麗に決めたのである！

まるで、漫画のように頭が砂場に埋まった。

まさにトラウマとともに、砂の中に植えつけられた。

そうか？これは漫画の世界の出来事だな？

いや、動いているからアニメか???

なら、俺が主人公だ！！

そして、彼女がヒロインだ！！！！

うひひ！

うひひひ！！

うひひひひ！！！！

砂場に刺さった主人公。かつこ悪すぎる。

ただ奇跡的にここが砂場で良かった。

砂アートLOVE！

ここが砂場でなければ、おそらく死ん…いや、チンでいただろう。
おばあちゃんに、昔から滅多なことで

『死ぬ』と言う言葉は使うな、と言われてきた。

ただ、本気でチンだかと思った。

天使に地獄を見せさせられるとは思ひもなかった。

「スリー！ツー！！ワン！！！！カンカンカンカンカン♪」

「…………ふおおむ…ふむみみ…まむ？（フォルする意味ある？）」

「

「より勝った気分を味わえるもん！ふんっだ！！」

「ふあいはむも…はんもうびば。（最悪の誕生日だ。）」

「誕生日なんだ？おめでと。ロウソクみたいでお似合いだよ？」

「もめまんめ、めんまんままみ！（お前なんて、天使なんかじゃない！）」

「うるさい！！煩惱！！」

意味も分からないくせに。

これが初恋の女の子の本性だなんて。

「そうだ、誕生日プレゼントあげる。今日から、煩惱を、あたしの子分にしてあげる！」

「もんまもむ、みまみ（そんなもの、いらない！）」

「煩惱のものはあたしのもの、あたしのものはあたしのもの！いい

「？」

お前はどこの怒羅夜鬼幼稚園のガキ大将だ。

「じゃあ、またね、煩惱。ナイナイよりも面白かったよ。また遊んであげる。」

「まむめめむめまみも！？もーみ！！（助けてくれないの！？おい！！）」

そんなこんなで、この後、
通りがかりのおばちゃんに事件と勘違いされ、通報された。

警察には、『女の子にやられた』といっても信じてもらえないし、父ちゃんと、母ちゃんには、『本当のことを言いなさい！』と何度も怒らるし、

病院の先生には『打ちどころが悪かったのでしょうね。』と言われ、入院させられる始末。

本当に最悪な誕生日だった。

しかし、誕生日パーティーはまだ終わってはいなかったのである。

ミカには、その後も、散々な目に遭わされた。

何かと、良く出くわすのだ。

お気に入りの漫画とゲームは全部取られ、

「ムシヤクシヤする」という理由だけで、エビ固めを決められ、

中2の時には、剛田とのストリートファイトで、盾にさせられた。

まあ、ミカが即効で倒してくれたおかげで、一発で済んだのが幸いだったが。

「煩惱も、たまには役に立つじゃない。ご褒美。」

そういつて、生まれて初めてのチューも奪われた。

初めて会った時から、こいつにはいろいろ奪われっぱなしである。

ただ、こんな危険なミカを、好きなままでもいいのだろうか。

こいつを彼女にする？

いや、いや、いや、いや、あり得ない。

こいつに今まで、どんな目に遭わされて来たかを忘れるな。

諦めた方が、身のためではないのか？

そんな葛藤を抱えながら、今現在に至る。

そう、高校3年の春が始まるのである。

恋の季節、春。

俺はミカに告白する！

場所はもちろん、決まっております。

初めて出会った、あの公園。

『おっぱい公園』で！！

002：最悪の誕生日（後書き）

002。いかがだったでしょうか？
ご期待に添えればうれしいです！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7999/>

B o m ! N o ! !

2010年10月10日00時32分発行